

文七元結

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂

青空文庫

さてお短いもので、文七元結ぶんしちもとゆいの由来という、ちとお古い処のお話を申し上げますが、只今と徳川家時分とは余程様子の違いました事で、昔は遊び人というものがございましたが、只遊んで暮して居ります。よく遊んで喰つて往ゆかれたものでございます。何うして遊んで暮しがついたものかという、天下御禁制の事を致しました。只今ではおやかましい事でございまして、中々隠れて致す事も出来んほどおかしいかと思ひますと、麗々と看板を掛かけまして、何か火入れの賽さいがぶら下つて、花牌はなふだが並んで出ています、これを買つて店み頭せきで公おもてむき然たに致しておりまして、楽たのしみを妨げる訳はないから、少しもお咎とがめはない事で、隠れて致し、金を賭かけて大きな事をなさり、金は沢山あるが退屈で仕方がない、負けても勝つても何うでも宜よいと、退屈しのぎにあれをして遊んで暮そうという身分のお方よろには宜よしゆうございしますが、其の日暮しの者で、自分が働あきに出なければ、喰あう事が出来ないような者がやりますと、自然商売おろそかが疎そになります。慾徳あなくゆえ、倦あきが来あませんか勝負を致し、今日で三日続けて商売に出ないなどということ、何うも障さわりになります

から、やかま厳しゆう仰おつしやる訳で、併しかし賭博ばくちを致いたしましたり、酒を飲んで怠惰なまけ者で仕方がないというような者は、何うかすると良い職人などにあるもので、仕事を精出して為しさえずれば、大して金が取れて立派に暮しの出来る人だが、惜おしい事には怠惰者だと云うは腕の好い人にございますもので、本所ほんじよの達磨だるま横町よこちょうに左官ちやうべえの長兵衛ちやうべえという人がございまして、二人前ふたりまえの仕事を致し、早くつて手際てぎわが好くつて、塵ちりぎわ際などもすつきりして、落らくが雁肌んはだにむらのないように塗る左官とまえぐちは少ないもので、戸前口とまえぐちをこの人が塗れば、必ず火の這入はいるような事はないというので、何どんな職人が蔵くらを拵こしらえましても、戸前口とまえぐちだけは長兵衛ちやうべえさんに頼むというほど腕は良いが、誠まことに怠惰なまけものでございませぬ。昔は、賭博ばくちに負けると裸体はだかで歩いたもので、只今ただいまはおやかま厳しいから裸体はだかどころか股引またひきも脱とる事が出来ませぬけれども、其の頃は素裸すつぽだか体で、赤合あかがつぱ羽はなどを着て、「昨夜ゆうべはからどうもすつぱり剥むかれた」と自慢しに為しているとは馬鹿ばか氣た事でございます。今長兵衛ちやうべえは着物まで取られてしまい、仕方なく十一じゅういちになる女の子おんなこの半纏はんてんを借りて着たが、余程よほど短く、下帯したびの結び目が出ていますが、平氣へいけいな顔をして日暮ひぐりにぼんやり我家わがやへ歸かえつて参り、

長「おう今歸かえつたよ、お兼かね……おい何どうしたんだ、真暗まつくらに為して置いて、燈火あかりでも点つけねえか……おい何ど処どこへ往いつてゐるんだ、燈火あかりを点つけやアな、おい何ど処どこ……其そこ処どこにゐるじやア

ねえか」

兼「あゝ此処ここにいるよ」

長「真暗だから見えねえや、鼻つまア撮つまれるのも知れねえ暗くれえ処とこにぶつ坐つッてねえで、燈火でも点けねえ、縁起わりが悪いや、お燈明でも上げろ」

兼「お燈明どこじゃアないよ、私は今帰つたばかりだよ、深川の一の鳥居まで往つて来たんだよ、何処まで往つたつて知れやアしないんだよ、今朝あさ宅うちのお久が出たつきり帰らねえんだよ」

長「エ、お久が、何処どこえ往つたんだ」

兼「何処どこへ往つたか解らないから方々探して歩いたが、見えねえんだよ、朝御飯を喰たべて出たが、それつきり居なくなつてしまつて、本当に心配だから方々探したが、いまだに帰けえらねえから私はぼんやりして草臥くたびれけえつて此処ここにいるんだアね」

長「ナ：ナニ知れねえ、年頃の娘だ、え、おう、いくら温順おとなしいたつてからに悪わりい奴にでもくつついて、え、おう、智慧ちええ附つけられて好いい氣になつて、其の男に誘いわれてプイと遠くへ往いくめえもんでも無ねえ、手前てまえはその為ために留守居留守をしているんじゃないアねえか、氣を附けてくれなくつちやア困るじゃアねえか」

二一

かね「留守居をして居るつたツて、斯こんな貧乏世帯を張はつてるから、使たいに出だす度たび一緒に附ついては往いかれませんよ、だが浮う気きをして情おとこ夫こを連つれて逃にげるような娘こじやアありません、親あいそに愛あ想いが尽つきて仕舞しつたに違ちがいなんだよ、十人並なの器き量りやうを持もつて、世間よでは温おしこ順なしい親孝行者おんこうこうだといわれてるのに、お前まへが三年越こし道みち楽がばかり為なして借金かだらけにしてしましまい、家うちを仕舞しうの夫婦別ふとふれをするののという事ことを聞きけば、あの娘むすめだつて心配しんぱして、あゝ馬鹿ばか／＼しい、何い時つまでも親おんのそばそばに喰く附ついてれば生な涯げうだつはあがらないから、何ど処こへか奉公ほうこうでもするか、何どんな亭主ていしゆでも持もつ方が、襪は襪はを着きてこんな真似まねをしてこんな親おんに附ついて居ゐようより、一層いっそうの事好いきい処ところへ往いつて仕舞しおうとお前まへに愛あ想いが尽つきて出でたのに違ちがいない、あの娘むすめが居ゐればこそ永ながい間ま貧乏世帯ひんぱんせたいを張はつて苦勞くろうをしながらこう遣やつていたが、お久ひさが居ゐないくらいなら私わたしは直すくに出でて往いつちまうよ」

長ちやう「お久ひさが居ゐなけりやア此方こつちも出でて往いつちまわアな、だからよう、己おれが悪いわるいから連つれて来きて呉くんな、父ちやんが悪いわるいツて是こゝから辛抱しんぱうするから、え、おい、お願ねがえだ、己おれだつてポカリと

好い目が出れば、又取返して、子供に着物の一枚も着せてえと思つて、ツイ追目に掛つたんだが、向後もうふツつり賭博はしねえで、仕事を精出すから、何処へか往つてお久をめつけて来てくんナ」

かね「めつけて来いたつていないよ」

長「いねえ〜と云つたつて何処か居る処え往つてめつけて来やアな」

かね「居る処が知れてるくらいなら斯様な心配はしやアしない、お戯けでないよ、私もお前のような人の傍には居られないよ」

長「居られねえたつて……え、おい、お久を何うかして……」

かね「何う探しても居ないんだ」

長「居ねえつて……え、おい」

かね「お前の形は何んだね、子供の着物なんぞを着てさ、見つともないじゃアないか」
 長「見つともねえつたつて、竹ん処のみい坊の半纏を借りて来たんだ」

かね「お尻がまるで出て居るよ、子供の半纏なぞを着て、好い気になつて戸外をノソノ歩いてゝさ」

とグズ〜云つて居ると、表の戸をトン〜叩き、

男「御免ください」

かね「はい只今開けます……誰か来たよ、お前隠れ場が……仕様がないなえ」

男「どうか開けておくんなさい、御免なさいまし……え、誠に暫く、何時もお達者で」

長「へえ……誰だつけ忘れちまった、何方でしたかえ」

男「エ、私は角海老の藤助でございます」

と云われて長兵衛は手を打ち、

長「おう、違えねえ、こりやアどうも、すっかり忘れちまった、カラどうも大御無沙汰

になつちまつて体裁が悪いんでね、こんな処え来てしまったんで、誠にどうもツイ……」

藤「お内儀さんが、一寸長兵衛さんに御相談申したい事があるから、直に一緒に来る

ようにという事で」

長「お前さんの処は余り御無沙汰になつて敷居が鴨居で往かれねえから、何れ春永に

往きます、暮の内は少々へまになつて、往かれねえから何れ……」

藤「兎や角う仰しやるだろうが、直にお連れ申して来いと、お内儀さんが仰しやるので」

長「直にたつたつて大騒ぎなんで、家内に少し取込があるんで、年頃の一人娘のあまつ

ちよが今朝出たつきり帰らねえので、内の女房も心配してえるんでね」

藤「お宅うちの姉ねえさんのお久さんは宅へ来ておいでなさいますよ、其の事に就ついてお内儀さんが貴方あなたに御相談があるので」

長「エ、…お久がお前めん処じこに往むかつてるとえ」

かね「あらまア本当ほんとうに有難ありがたう存ぞんじます、何処どこへ参まゐりましたかと存ぞんじて心配しんぱいして居ゐましたが、御親切ごしんせつに有難ありがたう存ぞんじます…お前まへさん直すくに往むかつて連れて来ておくれよ」

長「じゃアまアなんだ…直あじに後あとから往まゐりますからお内儀さんへ宜よろしく」

藤「直なに御同道ごどうだしろと申しましたから」

長「直なに往まゐつたつて何なにんですから、直じきに後あとから参まゐります、左様さやうなら宜よろしく」

かね「何なにんだよお前まへ、御親切ごしんせつに知しらせて下くだすつたのに何故なぜ直すくに往まゐかないんだよ」

長「なぜつたつて此この形なりじゃア往まゐかれねえ…手前てまえのを貸かしねえ」

かね「いやだよ私の着物きものがありやアしないよ」

長「手前てまえは宅うちに居ゐるんだからこの半纏はんちんを着きて居ゐやアな」

かね「そんなものを着きては居ゐられませんが、お尻しつぽんがまるで出でてしまふよ」

長「湯ふんどし巻まきを締しめてりやア知しれないよ」

かね「人が来きても挨拶あいさつが出来できないよ」

長「面と向つて話をして、後へ退る時に立てなければ後びつしやりをすればいゝ」
かね「おふぎけでないよ」

長「そんな事を云わねえで貸しな」

と無理やりに女房の着物を引剥いでこれを着て出掛けました。

三

左官の長兵衛は、吉原土手から大門を這入りまして、京町一丁目の角海老楼の前まで来たが、馴染の家でも少し極りが悪く、敷居が高いから怯えながら這入つて参り、窮屈そうに固まつて隅の方へ坐つてお辞義をして、

長「お内儀さん、誠に大御無沙汰をして極りがわるくつて、何んだか何うもね……先刻藤助どんにも然う申しやしたんですが、余り御無沙汰になつたんで、お見連れ申すくれえでござえやすが、何時も御繁昌のことは蔭ながら聞いておりやす、誠に何んとも何うもお忙がしい中をわざ／＼お知らせ下すつて誠に有難うござえやす……お久ア此処に打ツ坐つて、宅の者に心配を掛けて本当に困るじゃアねえか、阿母アはお前を探しに一の鳥居

まで往つたぜ、親の心配は一通りじやアねえ、年頃の娘がびよこく出歩いちやアいけねえぜ、何んで此方様へ来てえるんだ、こういう御商売柄の中へ」

内儀「それ処じやアないよ、こうしてお前の事を心配して来たのだ、這入りにくがつて門口をうろくしていたが、切羽詰りになつて這入つて来たんだが、私も忘れちまつたあね、お前が仕事に来る時分、蝶々鬚に結つてお弁当を持つて来たつきり、久しく会わないから、私も忘れてしまつたが、此処へ来て、此の娘がおいしく泣いて口が利けないんだよ、それからまアどうしたんだ、何か心配事でも出来たのかというと、此の娘が親の恥を申しまして済みませんけれども、親父がまだ道楽が止みませんで、宅へも帰らず、賭博ばかり烈しく致して居りますが、あすが日、親父の腰へ縄でも附きますような事がありますと、私も見てはいられません、漸々借財が出来まして、何うしても此の暮が行立たず、夫婦別れを為しようか、世帯をしまおうかというのを、傍で聞いて居りますと、私も子供じやありませんから、聞き捨にもなりませんので、誠に申し兼ねましたが、お役には立ちますまいけれど、私の身体を此方さまへ、何年でも御奉公致しますから、親父をお呼びなすつて私の身の代を遣つて、借財の方が付いて、両親交情好く暮しの附きますように為てやりとうございます、私がこういう処へつとめをしていますれば、よもや親父も私への義理

で、道楽も止もうかと存じます、左様なれば親父への意見にもなりますから、どうぞ私の身体をお買いなすつて下さいと、手を突いて私へ頼むから、私も恻びつくりしたんだよ、本当に感心な事だつて、当家にも斯うやつて沢山抱かゝの娘もあるが、年頃になつて売られて来るものは大概淫いたずら奔か何か悪い事を仕て来るものが多いんだのに、親の為に自分から駈込んで来て身を売るといふような者が又とある訳のものじゃアないよ、本当にこんな親孝行者に苦勞をさせて好い氣になつてちやア濟まないよ、お前幾歳いくつにおなりだ、四十の坂を越して、何うしたんだねまア、此の娘こに不孝だよ」

長「えゝ……誠にどうも面目次第しでえもござえやせん、そんな事と知らねえもんですからね、年頃にもなつてやすから、ひよつと又悪い者が附いて意地でも附けて遠くへ往つちまつたかと思つて、嬢かアも驚きやして、方々探して歩いた訳なんで、へえ、お久堪忍してくれ、誠に面目次第もねえ、汝てめえにまでおれは苦勞をさせて」

と云いさして涙を浮うかめ、声を曇らし、

長「実は己おらアお内儀さんの前めえだが、汝てめえに手を突いて謝るくれえ親の方が悪いんだが、汝の知つてる通り、此の暮は何うしても行立たねえ訳になつちまつたんだけれども、たつた一人の娘を女郎じようろうに売りたくもねえし、世間へ対てえしても濟まねえ訳だ、又本意でもねえか

ら、然そんな事を為したくもねえが、何ううでも斯こうでも此この暮こが行立たたねえから、お久ひさ、親おやが手てを突ついて頼たのむが、何うかまア他家ほかさまなら願ねえ難にくいが、此こ方ちさまだから悪わるくもして下さるめえから、此こ方ちさまへ奉ほう公こうして、二年にか三年さん辛しん抱ぼうしてくれ、ば、汝なんぢの身みの代しろだけは一旦いつたん借か金かの方かたせえ付けてしまえば、己おれがまたどんなにでも働はたれて、汝なんぢの処ところは何なんとかするが、然そうしてくれ、ば己おれへの良いい意見いけんだから、向き後こうふつつりもう賭ばく博ちのぼの字じも断ことわって、元もと々々通とり仕し事を稼かせいで、直じに汝なんぢの身み受うを為しに来きるから、それまで汝なんぢ奉ほう公こうしてえてくれ」

四

久ひさ「私わたしは、固もより覚め悟とをして来きた事ことだから、何い時つまでも奉ほう公こうしますけれど、お前まへまた私わたしの身みの代しろを持もつてつてしまつて、いつものように賭ばく博ちに引ひ掛かつてお金かねを失してしまつと、お母おつかあがまたあゝいう気き象さうだからお前まへに逆さからつて、何なんだ彼かんだというとお前まへが又また癩か癩かを起おこして喧けん嘩かを始はめて、手て暴あららい事ことでもして、お母おつかあの血ちの道みちを起おこすか癩か癩かでも起おこつたりすると、私わたしがいればお医い者しやを呼よびに往いつたり、お薬くすりを飲のましたりして看かん病びやうする事ことも出来きますが、私わたしがないと、お母おつかあを介かい抱ぼうする人ひとがないのだから、後あと生せいお願ねがいだが、私わたしは幾いく年ねんでも辛しん抱ぼうするか

らお前お母と交情なかよ好く何卒どうぞ辛抱して稼いでおくんなさいよ、よ」

長「あいよ……あいよ……誠まことに何うもカラどうも面目次第しでえもござえやせんで、何なんと
もはや、何うも、はア後悔こうけえしやした」

内儀「御覽よ、こういう心だもの、実に私も此の娘こには感心してしまつたが、お前幾干いくら
お金があつたら此の暮ゆきが行立ゆきたつんだよ」

長「へえ私共わっちの身の上でござえやすから百両いっぽんもあればすつかり綺麗さつぱりになるん
で」

内儀「百両ひゃくりようで宜いのかえ」

長「へえ……」

内儀「それではお前に百両のお金を上げるが、それというのも此の娘の親孝行に免じて
上げるのだよ、お前持つて往つて又うっかり使つてしまつては往けないよ、今度のお金ば
かりは一生懸命にお前が持つて往くんだよ、よ、いゝかえ、此の娘の事だから私も店へは
出し度たくもない、というは又悪い病でも受けて、床にでも着かれると可哀そうだから、斯こ
う云う真実の娘ゆえ、私の塩梅あんばいの悪い時に手許てもとへ置いて、看病がさせ度いが、私の手許
へ置くとしようと、お前に油断うげだが出るといけないから、精出して稼いで、この娘を請出うけだしに

来るが宜いよ」

長「へえ私も一生懸命になつて稼ぎやすが、何うぞ一年か二年と思つて下せえまし」

内儀「それでは二年経つて身請に來ないと、お気の毒だが店へ出すよ、店へ出して悪い病でも出ると、お前この娘の罰は当たらないでも神様の罰が当るよ」

長「えゝそれは当ります、へえ有難うござえやす、貧乏世帯を張つてるもんですから、母親と一緒に苦勞して借金取のとけえ自分で言訳に往つて詫ごとをしてくれるんです：

…へえ、其の代りお役には立ちやすめえから、一々小言を仰しやつて下せえやし、お久、お内儀さんも斯う仰しやつて下さるから何だが、店へ出てお客の機嫌氣棲の取れる人間じやアねえが、其の中にやア様子も解るだらうから…：己は早く家へ歸つてお母にも悦ばせ、借金方を付けて、質を受けて、汝の着物も持つて来るから」

内儀「そんな事は宜いよ、江戸行の時に取りに遣るから…：お前財布があるまい、お金も丁度他家から來たのがあるから財布ぐるみ百兩貸して上げるよ、さア持つておいで」

長「へえ、誠に何うも、有難うござえやす、じやアお内儀さん直にお暇しやす」

内儀「早く家へ往つてお内儀さんに安心させてお上げよ」

長「じやアお久、宜いか」

久「お母つかさんによくいつておくれよ」

長「あい、あい」

と戸外へ出たが、掌ての内の玉を取られたような心持で腕組を為ながら、気抜の為たように仲の町ちやうをぶら／＼参り、大門を出て土手へ掛り、山の宿しゆくから花川戸へ参り、今吾妻橋しを渡りに掛ると、空は一面に曇つて雪模様、風は少し北風ならいが強く、ドブ／＼と橋間へ打ち附ける浪の音、真暗まつくらでございます。今長兵衛が橋の中央なかばまで来ると、上手うわてに向つて欄干へ手を掛け、片足踏み掛けているは年頃二十三の若い男で、腰に大きな矢立を差した、お店たな者風体な男が飛び込もうとしていますから、慌あわて／＼後うしろから抱き止め、

長「おい、おい」

男「へ、へえ」

長「気味の悪い、何なんだ」

男「へえ…真ま平御免まっぴらなさいまし」

長「何なんだお前は、足あしを欄干へ踏ふん掛けて何なにうするんだ」

男「へえ」

長「身投げじゃアねえか、え、おう」

男「なに宜よろしゆうございます」

長「なに宜いい事があるもんか、何んだ若わえ身空アして……お店風だが、軽はずみな事をして親なげに歎なげきを掛けちやアいけねえよ、ポカリときめちまってガブ／＼騒さわいだつてお前めえ助すけかりやアしねえぜ、え、おい、何なんで身を投なげるんだえ」

五

男「御親切に有難うございます、私も身を投なげる気はございませんが、逆とても行立ちません、もう思案も分別も仕尽あかつきしました暁あかつきに覚悟きわを極きわめたので、中々容易な事ではございませんから、お構まいなく往いらしつて下さいまし」

長「お構まいなくつたつて、お構まいなく往いかれるかえ、人情としてお前めえの飛とび込むのを見て、ア、然そうかといつて往いかれねえじやアねえか何なんで死ぬんだよ、店たな者ものだから大方女郎たなのつかい込みで、金が足らなくつて主人に済すまねえつて……極めつてらア、然そうだろう」

男「いえなに然そんな訳わけじやアないが、なに宜よろしゆうございます」

長「宜よろしくねえよ、冗談じやアねえぜ、え、おう」

男「御親切は有難う存じます、私は白銀町三丁目の近卯と申します鼈甲問屋の若い者ですが、小梅の水戸様へ参ってお払いを百金戴き、首へ掛けて枕橋まで参りますと、ポカリと胡散な奴が突き当りましたから、はつと思つてると、私の懐へ手を入れて逃げて行きましたから、何を為やアがると云つて、後で見ますと金が有りませんから、小僧の使ではなし、金を泥坊に奪れたといつて帰られもせず、と云つて何処へ往つて相談致すという処もございませんから、身を投げるんで、大金の事でございますから何んな処へ参りまして相談を致しても無駄でございますから身を投げるのでございます、何うぞお構いなく往らして」

長「百両奪られちまつたのかえ、何うも為ようがねえなア、冗談じゃアねえぜ、大店なんてえもなアおおまかだなア、己ツちの身の上では百両の金で借金を残らず払つて、好い正月が出来るんだが、本当に、大金を奪られるような者に払いを取りに遣るとはおおまかなもんだなア、お前もまた間拔じゃアねえか、胴巻へ入れて確り懐へ入れて置けば宜いのに、百両といえば重え金額だ、本当に冗談じゃアねえぜ、だがの……金で生命は買えねえや、え、おう、何処へ相談しに行きねえな、旦那に逢つて然う云いねえ、泥坊に奪られて誠に面目次第もござえやせん、全く奪られたに違え有りやせんて、え、おう何処へ往つ

て相談して見ねえな」

男「へえ、相談したくも親も兄弟も無い身の上で、主人も手前ばかりは身寄頼りのない身の上だから、辛抱次第で行々は暖簾を分けて遣る、其の代り辛抱をしろ、苟にも曲つた心を出すなど、熟々御意見下すつて、余り私を鼻眞になすつて下さいますもんだから、番頭さんが嫉んで忌な事を致しますから、相談も出来ませんが、何うしても私が女郎買でも為て使い込んだときやア思われませんか、面目なくつて旦那さまに合す顔はございません、なに宜しゆうございますからお構いなく往らして」

長「いけねえなア、何うしてもお前死なくツちやアいけねえのか……じやア仕方がねえ、金ずくで人の命は買えねえ、己も無くツちやアならねえ金だが、お前に出会ったのが此方の災難だから、これをお前に……だが、何うか死なねえようにしてくんなナ、え、おう」

男「へえ、死なないように致しますから、お構いなく往らして下さいまし」

長「お構えなくツたつて……じやア往くから屹度死なねえとはつきり極りをつけてくんなよ」

男「宜しゆうございます、死にません、く、へえ」

長「冗談じゃアねえぜ、往くよ宜いか」

と云いながらバタ／＼と二十歩ばかり駈けて来たが、何うも気に成るから振り返て見ると、其の若い者がバタ／＼と下手の欄干の側へ参り、又片足を踏掛けて飛び込もうとする様子ゆえ、驚いて引返して抱き留め、

長「まア待ちなよ、待ちなてえに……それじゃア何うしても金が無けりやア生きて居られねえのか、仕様がねえなア、さア己がこれを……だが何うか死なねえような工夫はねえかなア……じゃアマア仕方がねえ……困るなア」

男「お構いなく往らッして、御親切は解りましたから」

長「じゃア往くよ」

とバラ／＼と往きに掛ったが、又飛び込もうとするから、

長「仕様がねえなア此の人は、冗談じゃアねえぜ、金が無くツちやア何うしてもいけねえのか」

男「へえ、有難う存じますが」

とさめ／＼と泣き沈み、涙声で、

男「私だッて死に度はございませんけれども、よんどころない訳でございませうから、何

うぞお構いなく往らしつて、もう宜しゆうございます」

長「お構いなくつたつて往けねえやな、仕方がねえ、じゃア己が此の金を遣ろう」

六

長「実は此処こゝに百両持つてるが、これはお前めえのを奪とつたんじゃアねえぜ、己は斯こんな嬬か、あの着物くればを着て歩く位の貧乏世帯じよてえの者が百両なんて大金てえきんを持つてる氣遣きづけえはねえけれど、己に親孝行な娘が一人有つての、今年十七になるお久てえ者もんだが、今日吉原の角海老へ駆かっ込んでつて、親父が行立ちませんから何うか私の身体を買つておくんなさい、親父への意見にもなりましようからつて、娘が身を売つて呉れた金が此処こゝに在あるんだが、其の身の代をそっくりお前に遣るんだ、己ん処とこの娘は、泥水へ沈んだツて死ぬんじゃアねえが、お前は此処から飛び込んで本当に死ぬんだから、此れを遣つちまうんだ、其の代り己は仕事を為して、段々借金を返けえして往つた処とこが、三年かゝるか、五年掛るか知れねえが、悉すつ皆かり借金を返けえし切つて又三年でも五年でも稼かがなけりやア、百両の金を持って、娘の身請しを為しに往く事が出来ねえ、あゝ何なんでも斯かんでも娘を女郎じよらうにするのだ、仕方がねえ、其の代

り己の娘が悪い病やゆえを引受けませんよう、朝晩凶事なく達者で年期の明くまで勤めますようにと、お前心に掛けて、ふだん信心する不動様でも、お祖師様でも、何様へでも一生懸命に信心して遣つておくれ」

男「何う致しまして左様な金子は要りません」

長「己だつてき遣りたくも無ねえけれどお前めえが死ぬというから遣るてえのに、人の親切を無にするのけえ」

と云いながら放り付けて往きました。

男「やい何を為しやアがるんだ、斯こんなものを打ぶつけやアがつて、畜生め、財布の中いへ礫しころか何か入れて置いて、人の頭へ叩き附けて、ざまア見やアがれ、彼あんな汚なりない形なりを為しいながら、百両なんてえ金を持つてる氣遣きつけえはねえ、彼あんな奴どろぼうが盗どろぼう賊なだか何なんだか知れやアしない、此こんな大きな石を入れて置きやアがつて」

と撫なでなて見ると訝おかしな手て障ざわりだから財布の中お手かを入れて引出して見ると、封ふう金きんで百両有りましたから恟びつりして橋たもとの袂おまで追お駆つかけて参り、

男「もしお前さん、今のお方もし……ア、もう見えなくなつちまつた……有難あつう存こじま
す、此の御恩は死んでも忘れやア致あしません、左様なお方とも存あじませんで悪あつ口こうを吐つき

まして済みません、誠に有難う存じます、必ず一度は此の御恩をお返し申します、有難う存じます」

と生返つたような心持になりましたから、取急いで白銀町三丁目の店へ帰つて参りましたが、御主人は使いの帰りが遅いから心配でございます。

主人「平助^{へいすけ}どん、未だ帰りませんか文七は」

平「へえ、まだ帰りません、使いに出すと永いのが彼の癖^{あれ}で、お払い金などを取りにお遣りなさるのは宜しくない事で、誠に困りましたな」

主「帰つたら能く小言をいしましょう」

と心配して居る処へ表の戸をトン／＼／＼、

文「番頭さんトン／＼／＼……番頭さん文七でございます、只今帰りました」

平「旦那、文七が帰りました」

主「よく然^そういつてくんな」

平「今開けるよ……何^どう云うもんだなア、余^{あんま}り遅^{おそ}いじやアないか掛^{かけ}廻^{まわ}りに往つた時などは早く帰つて来てくれないと、旦那のお小言^{わし}が私^{わし}の方へ来るから本当に迷惑だ、冗談じやアないぜ」

文「誠に遅くなりました、つい高橋様のお相手を為て居りまして、御機嫌を取りく種々お話しになりましたので、大きに遅くなりまして誠に相済みません」

平「旦那文七が帰りました」

主「さアく此方へ遣しておくれ、実に困ります」

文「旦那只今、高橋様で種々世の中のお話が有りまして、又碁のお相手を致したものですから大きに遅くなりました、え、それから高橋様が此方から持って参りました革の財布を御覧なさいまして、商人は妙な財布を持つ、少し借り度い、其の代り此方の縞の財布を貸して遣ると仰しやつて、是を拝借致しまして、金子は慥に百両受取つて参りましたから、お改めなすつてお受け取り下さいますように」

主「なに金を……何を云うんだな、変な人だな、実に、文七は使に出せないね、本当に」

七

主人「お得意先へ掛け廻りに往つて、其処でお相手をするつたつて碁を打つという事はありませんよ、お前は碁にかゝるとカラ夢中だから困る、お前が帰つて仕舞つた後を見る

と碁盤の下に財布の中へ百両入ったなり有ったから、高橋様がお驚きなすつて、さぞ案じて居るだろうから早く知らせて遣れと仰しやつて、彼方の御家来が二人で提灯を点けて先刻金子は届けて下すつたのに、虚言を吐いて……革財布は彼方で入用とはなんだ、ちやんと此処に百金届いていますよ……其の百両の金は何処から持って来たんだ」

文「へエ……それは大変」

主「なに」

文「それは何うも、大変な事で」

主「何んだ」

文「へエ……それじゃア私や奪られなかつたんだ」

主「何んだ、お前はどうも訳の解らん事を云うからしようがない、平助どん、此の金の出所を調べておくれ、イエサ、未だ二十二や三になるものに、百両という大金を自由にされるような事は有るまい、お前へ店を預けて置くのに、またこれがどう云う融通をして、何処に金を預けて置くか知れねえから此の百両の出所を調べてくんな」

平「へエ……おい、お前私が迷惑するよ、冗談じゃアない、困るよ、疾うに金は届いてる処へ又百両持つて来るてえのは訝しいじゃアないか」

文「へエく、誠に粗忽そこつ千万な事を致しました、何んとも何うも申訳はございませんが、実は慥たしかに懐へ入れてお邸やしきを出た了簡でございまして、枕橋まで参ると怪しい奴わたくしが私に突き当りながら、グツと手を私の懐の中へ入れました時に奪とられたに違いないと思ひ、小僧の使じやアなし、旦那様に申訳がない、百両の金子を奪られては済まんと思ひまして、吾妻橋から身を投げようと致す所へ通り掛つたお職人てい体の方が私わたしを抱き止めて、何ういう訳で死ぬかと尋ねましたから、これくと申すと、それは氣の毒だ、此処こゝに百両有る、これを汝てめえに遣るから泥坊に奪られない積りで主人の処とこへ往くが宜い、併しかしそれは尋常たゞの金じやない、たつた一人の娘が身を売つた身の代しろぎん金だけでも、これを汝に遣るからと仰しやつて、御親切なお方に戴いて参りましたのでございまして」

主「イヤハヤ何うも呆れちまつた、何うだろう、其のお方が通らんければドブリと飛び込んで仕舞い、土左衛門になつちまつたんだ、ア、危い処とこだ、ム、其のお方はお前の命の親だ、御真実なお人だの、何うも百金と云う金を直すぐに恵んで下さるとは有難いお方だ、その何は何処どこのお方で何んと云うお方様だ」

文「へエ……何んてえお方だか存じません」

主「馬鹿だねお前何うもコレ百両という大金を戴きながら、其のお方のお名前も宿しゆくし

所よも聞かなくてえ事はありませんよ」

文「お名前も所もお聞き申す間もないので、アレ〜といつてる中に、ポンと金を打ッ
附けて逃げて往ゆきました」

主「金を人に投げ附けて逃げて行く奴があるものか、お名前が知れんじやアお礼の為し
うもなし、本当に困るじやアねえか」

文「へエ、誠に何うも済みませんで」

主「ムー……娘を売った金とかいったな」

文「へエ、その今年十七になるお久さんという娘の身を角海老へ売った金が百両あるか
ら、これをお前に遣るが、娘は女じやうろ郎にならなけりやアならない、悪い病を受けて死ぬか
も知れないから、明あけくれ暮凶事のないように、平ふだん常信心する不動様へでも何なんでも、お線香
を上げてくれと、男泣きに泣きながら頼みましたが、旦那さまえ、何うか店の傍わきへ不動様
を一つお拵こしらえなすツて」

主「何んだ馬鹿ア云つて……コーと角海老というのは女郎屋さんだ、其そこ処へ往つてお久
さんという十七になる娘が身を売ったかと聞けば、それから知れるが、私わしは頓とんと吉原へ往
つた事がないのだ、斯こういう時には誠に困る、店のものも余あまり堅いのは斯ういう時に困る

な、吉原へは皆な往つた事がないからのう、平助どんなぞも堅いから吉原は知るまい」

平「エ、角海老てえ女郎屋は京町の角店で立派なもんです」

主「お前吉原へ往つたのかえ」

平「此間三人で：イエ何にソノ」

主「ごまかして時々出掛けるね、併し今夜は小言を云いませぬ、夜更の事だから、向
後たしなみませんといけませんよ」

と別に小言もなく引けました。

八

翌朝主人は番頭を呼んで何かコソ／＼話を致しましたが、やがて番頭の平助は何れへ
か飛んで往き、暫く経つて帰つて来まして、またコソ／＼話をしましたが、解つたと見え
まして、

主人「羽織を出してくんナ……文七や供だよ」

文「へエ」

と文七が包つみを持って旦那あとの後へ随ついて観音様へ参詣を致し、彼れあから吾妻橋へ掛りました時に文七は「あゝ昨夜ゆうべ此処こゝで飛び込もうとしたかと思つうと悚然ぞつとするね」と云いながら橋を渡つて参りました。

主人「本所達磨横町というのは何処どこだえ、慥か此所こゝかと思つうが、あの酒屋さんで聞いて見な左官の長兵衛さんというお方がございますかッて」

文「へエ……少々物を承ります、エ、御近所に左官の長兵衛さんて方がございますか」番頭「それはね、彼処あそこの魚屋の裏へ這入ると、一番奥の家うちで、前に掃溜はきだめと便所ちようずばが並んでますから直じきに知れますよ」

主人「大きに有難う存じます、それから五升の切手を頂戴致します、柄樽えたるを拝借致します、樽こちらは此方で持つて参りますから」

と代を払つて魚屋の路地へ這入つて参ります。此方は長兵衛の家うちは昨夜ゆうべからの騒ぎでござざいます。

兼ど「何うするんだよ、何処どこへお金を遣つたんだよ」

長「何処へつて遣つちまつたよ」

兼「お金を預けた処ところをお云いな」

長「預けたんじやアねえよ、遣つちまつたんだてえに、解らねえ、昨夜から終夜責めてやアがつて些とも寝られやアしねえ、己だつて遣りたくはねえが、人が死ぬつてえんだ、人の命に換えられるけえ」

兼「ふん、人を助けるなんてえのは立派な大家の旦那様のする事だよ、娘が身を売つてお前の為に百両拵えてくれたものを、ムザ／＼他人に遣つちまうてえ奴があるかえ本当に、何処かへ金を預けて置いて、又賭博の資本にしようと思つて、本当に其の金はどうしたんだよ、何処へ遣つたんだよう」

長「己だつて遣り度くはねえ、余り見兼たから助けたんだ」

兼「ふん、見兼て助ける風かえ、足を掬つて放り込むだろう」

長「誰が放り込む奴があるものか」

とグズ／＼いつている処へ、

主人「ハイ御免下さいまし」

長「おゝ、無闇に開けちやアいけねえよ……見つともねえ、そんな形をして、人が来たんだよ、己が挨拶をするまで其処に隠れていねえ」

兼「見つともないたツて誰が斯んな形に仕たんだよ」

長「え、大きな声をするな、見つともねえから二枚折の屏風びようぶの後へ引込んでな、え、もう開けても宜ようがす」

主人「御免下さいまし、長兵衛さんと仰しやる棟梁ちんりやうさんのお宅たくは此方こちらで」

長「え、何なに棟梁でも何んでもねえんで、へ、縮屋ちぢみやさんかえ」

主人「イエ私わたくしは白銀町三丁目近江屋卯兵衛おうみやうへえと申しまして鼈甲渡世を致すもので、此者これをお見覚えがございますか……何どうかよく此の奉公人の顔を御覧なすつて……文七此方こちらへ出て此のお方のお顔を見な」

文「へエ、此のお方……ア、此のお方でございます、昨晩は誠に有難う存じます……：……旦那様此のお方が私わたくしを助けて下さつたに違ちがいなので」

長「お、此の人だ、お前めえだ、何どうもまあ宜よかった、お前に金を遣つたに違ちがえねえね……賭博ばくちの資本もとでに他わきへ預けたんじやアねえ、チャンと証拠しんこがあるんだが、まあ宜よかったノ」

文「へエ、何どうも、是は何どうも、昨夜ゆうべは暗くつて碌ろくにお顔も見えませんでした、お蔭かげ様で助かりまして有難う存じます」

主人「其の折はまた此者これが不調法な詰らん事を申し貴方に御苦勞を掛けまして、何なんとも何どうもお礼の申上げようがございませぬ、まったくは此者が泥坊に奪られたものではござい

ません、お屋敷へ忘れて参りましたので、此の者が宅へ帰らんうちに金子はお屋敷から届けて参りましたから、何うしたのかと案じて居ります処へ此者が帰つて参りまして、金子を出しましたから、不思議に思ひまして、段々調べて見ますと、まったくは賊に奪られたと心得て、吾妻橋から身を投げようとする処へ、これくのお方が通つてお助けなすつたという事ゆえ、取敢とりあえずお礼に出しましたが、何んとも何うも恐入りました、有難う存じます」

九

主人「私わたくしども共も随分大火災おおやけでもございますと、五十両百両ほごこしと施を出した事もあります、一軒前一分か二朱にしきやア当りませんで、それは名みょうもん聞、貴方は見ず知らずの者へ、おいそれと百両の金子を下すつて、お助けなさるといふ其のお志というものは、実に尊い神様のようなお方だつて、昨夜さくやもね番頭と貴方のお噂を致しましたなれども、お名前が知れず、誠に心配致しておりましたが、ようやくの事で解りましたから、御返金に参りましたが、慥たしか此れは角海老さんとかで御拝借の財布だそうで、封金のまゝ持つて参りま

したから、そつくりお手許へお返し申します。」

長「えゝ」

と手に取上げて考え、

長「金子が出たんですか」

主「へエ、金子は奪られは致しません、此者より先きに宅へ届いて居りましたから二重でございます」

長「ムゝ：じやア此の人は奪られねえのかえ、冗談じやアねえぜ、え、おう、己アお前のお蔭で夜びて嬬に責められた……旦那間違だつて程があらア」

主人「此者も全く奪られたと思つたので、誠に何うも何んともお礼の申し上げようはございませんが、金子は其の儘お受取りを願います」

長「だがね、これを私が貰うのは極りが悪いや一旦此の人に遣つちまつたんだから取返すのは極りが悪いから、此の人に遣つちまおう、私は貧乏人で金が性に合わねえんだ、授からねえんだらうから、此の人が店でも出す時の足にして下さえ、一旦此の人に授かつた金だから、何うか遣つておくんねえ」

主人「イエゝゝどう致しまして、奪られたら戴きます、御氣象は解りましたから、併し

全く二重に金を私が戴く訳で」

長「だがね、何うも……だからよ、貰つて置くから宜いじやアねえか……誠にどうも旦那ア、極りが悪いけれど、私も貧乏世帯を張つてやすから此の金はお貰え申しやしよう」

主人「それは誠に有難い事で、就きましては貴方のような御侠客のお方と御懇意に致していただけます、此方の曲つた心も直ろうかと存じますので、押附けた事を願つて誠に恐入りますが、今日から親類になつて下さるうちに、私は兄弟と云う者が無い身の上でございますゆえ、今年からお供の取遣りを致します、明日あたり餅搗きを致しますから、直にお供をお届け申しますが、何うぞ幾久しく御交際を願います」

長「冗談いつちやアいけやせん、私のような貧乏人が親類になろうもんなら、番ごと借りにはかり往つて仕ようがねえ」

主人「イエ、何うか願います、それに又此の文七は親も兄弟もないもので、私どもへ奉公に参つた翌年に親父がなくなりましたが、実に正道潔白な人間ですが、如何にも弱い方で店でも出して遣りたいが、然るべき後見人が無ければ出して遣れんと思つておりました、貴方のようなお方が後見になつて下されば私は直に暖簾を分けて遣るつもりで、

命の親という縁もございませうから、親兄弟の無いものゆえ、此者を貴方の子にして遣つて下さいまし、文七も願いな」

文「何うか貴方、然うでもして下さいませんと、私は貴方に御恩返しわたぐしの仕方がございませぬ、不束ふつつかでございませうが、私を貴方の子にして下されば、どんなにでも御恩返しに御孝行を尽します」

長「へエ、どうも旦那ア妙ですナ、へんてこですな」

主人「イエも何う致しまして、親子兄弟固めの献酬さかづきを致しましょう…先刻さつきの酒を、その柄樽を文七」

文「へエお肴さかなが」

主人「イエサもう来ているだろう」

と云いながら腰障子を開けると、其の頃の事ゆえ、四ツ手駕籠で、刺青ほりものだらけの昇夫かづやが三枚で飛ばして参り、路地口へ駕籠を下し、あおりを揚げると中から出たのはお久で、昨日きのうに変わる今日きょうの出立ちいでた、立派になつて駕籠の中より出ながら、

久「お父さんとつ帰つて来たよ」

長「ムーンお久…どうして来た」

久「あの此処こゝにいらつしやる鼈甲屋の旦那様に請出うけだされて帰つて来たよ」

兼「オやお久、帰つたかえ」

と云いながら起つと、間が悪いからクルリと廻つて屏風の裡うちへ隠れました。さて是から文七とお久を夫婦に致し、主人が暖簾を分けて、麴町こうじまち六丁目へ文七元結の店を開いたというお芽出度めでたいお話でございます。

(扱酒井昇造速記)

青空文庫情報

底本：「定本 圓朝全集 卷の一」近代文芸・資料復刻叢書、世界文庫

1963（昭和38）年6月10日発行

底本の親本：「圓朝全集卷の一」春陽堂

1926（大正15）年9月3日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号はそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」は、それぞれ「其の」と「此の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※表題は底本では、「文七元結《ぶんしちもとゆい》」となっています。

入力：小林 繁雄

校正：かとうかおり

2000年5月8日公開

2016年4月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文七元結

三遊亭圓朝

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>